

森本倫世さんの

「誰かが私を待っている」を読んで

池上国雄(陣山)

森本さんの「誰かが私を待っている」を読んで非常に感動しました。森本さんは体が不自由なそうですね。苦しい生活の中から生まれた真珠のような論文です。

私も聴力障害で身障四級です。現在六十七歳になりますが、小学校入学当時より六十年間不自由な生活を強いられてきました。学校時代のいわゆるいじめは日常茶飯事で、人並みに聞こえないという劣弱者に対するいやがらせ、困らせて面白がる等、陰湿なことが多く教えられません。大人になっても理不尽な行為を受けることが多

多あります。

しかし、大多数の人々は親切で、この人たちに支えられ、勇気を与えられて今日まで曲がりなりにも暮らしてまいりました。このような人生を送るについては、弱い心ではとても世の荒波を切り抜けることはできないと、常に自分のともしれば屈しがちな気持ちにむち打って、少数の理不尽な人たちのいじめに類する行為に反発してききましたが、これによって対人関係がきれいにいかず、円満を欠くことが多いのです。

六年前、家内が病気になるまで。それまでは非常に健康でよく

『ほのほの広場』に、あなたの身の回りのほのほのとした話題や我が家の自慢料理、読書の感想など、お気軽にご投稿ください。

▼投稿先・〒783 南国市大浦甲一三〇一 南国市役所内広報委員会まで。

働いてくれ、今日私がほとんど無為の生活を送つてもさして困らぬ元を作つてくれた伴りよでしたが、どうしたことでしょう。多発性硬化症という難病で、入院も四病院五回にわたり、今では左手と両脚は全然利きません。わずかに右手で食事を、それもスプーンで、ときには手づかみで食べて、ようやく日を送っており、立ち居、排便等、全部人手をわすらわす生活です。身障二級の認定を受け、病院暮らしをしています。

病院には付き添いさんがいて、昼夜めんどろを見守ってくれ、感謝しています。しかし、この付き添いさんも他人であり、やはり人間です。家内のようなめんどろな病人は敬遠し、楽な病人にかかることを望むのも人情でしょう。手足がほとんど不自由な家内を扱うことは、中風のように半身だけでもふんばれる病人に比べれば、まことに重く、女の付き添いさんではなかなか手に負えないところが多いので、文句の種になります。「おばあさんが肥満するからあんまり食べさせるな」などと言つて好きなものも食べさせない人もありました。そこで、多くの付き添いさんに森本さんのような「誰かが私を待っている」という気持ち、信念を持つてもらえたらと、森本さんの論文を読んだとき切実に感じたことでした。

私も一週間ごとに病院へ家内を見に行きます。もちろん家内のことですから感謝の言葉など聞かせませんし、期待もしませんが、その気持ちは痛いほどよく分かります。家内が私を待っている、「誰かが私を待っている」なんと今の私の気持ちに適切に言い表してくれる言葉でしょうか。

家内は内臓は悪くありません。好きなものはよく食べるので、家



「ご家庭で話し合つて答えてください。答えはこの広報に出て

います。

■もんだい・三月十五日、市役所で「母子父子家庭新入児童中

卒者〇〇会」が開かれました。

■しめきり・4月15日

■あて先・〒783 南国市大浦甲一三〇一 南国市役所内広報委員会親子クイズ係

■答えのハガキには必ず、住所、氏名、年齢、職業を書いてください。

■賞品・正解者のなから、抽選で五人に図書券を進呈。

第180回当選者発表(敬称略)

(応募総数59通)

■答え・婦人協(クラブ)

■当選者五人

北川孝子(岡豊町蒲原)

土居千茶(千市)

中屋かおり(片山)

藤原由紀子(物部)

山本テルエ(岡豊町蒲原)

